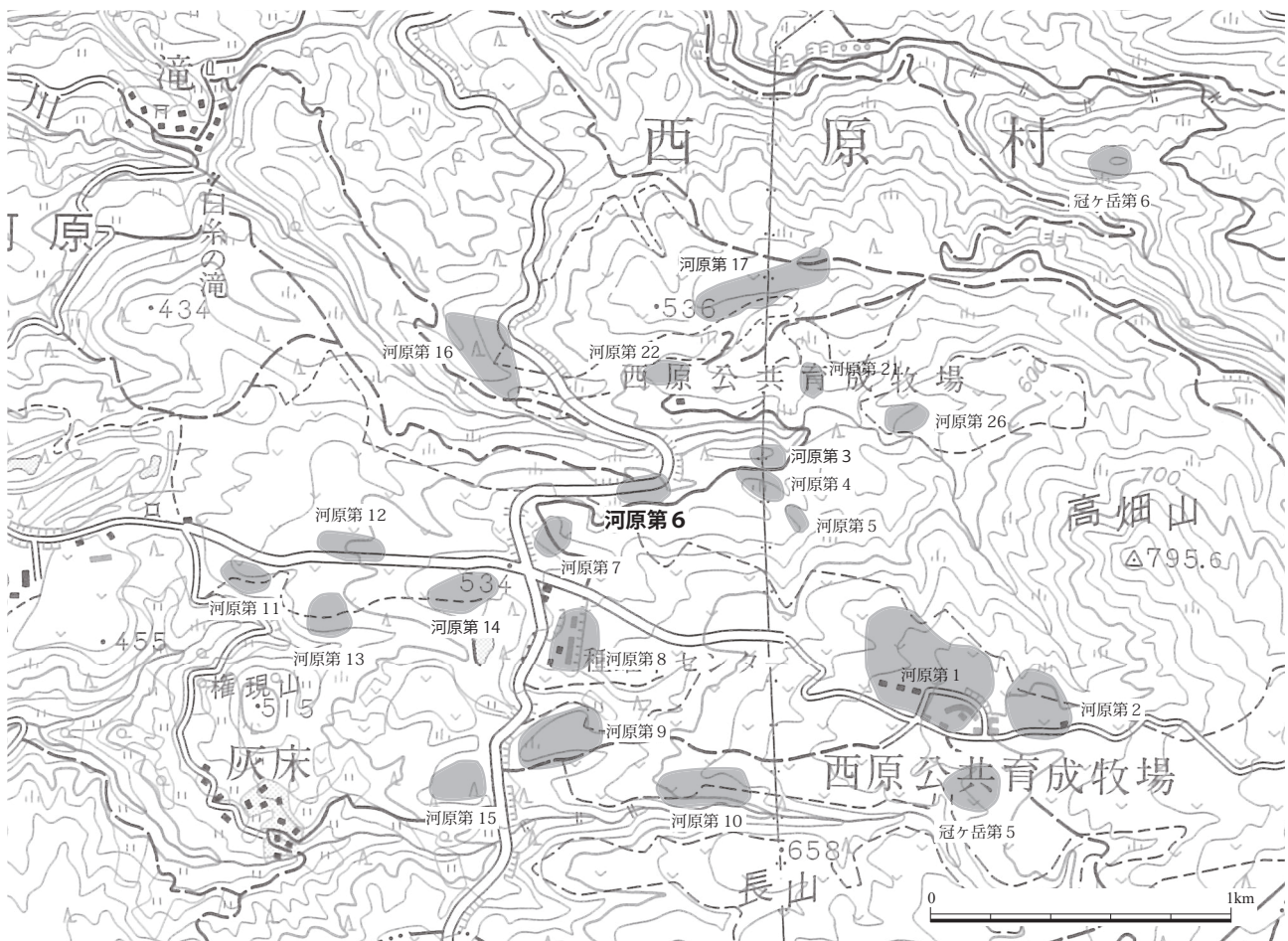


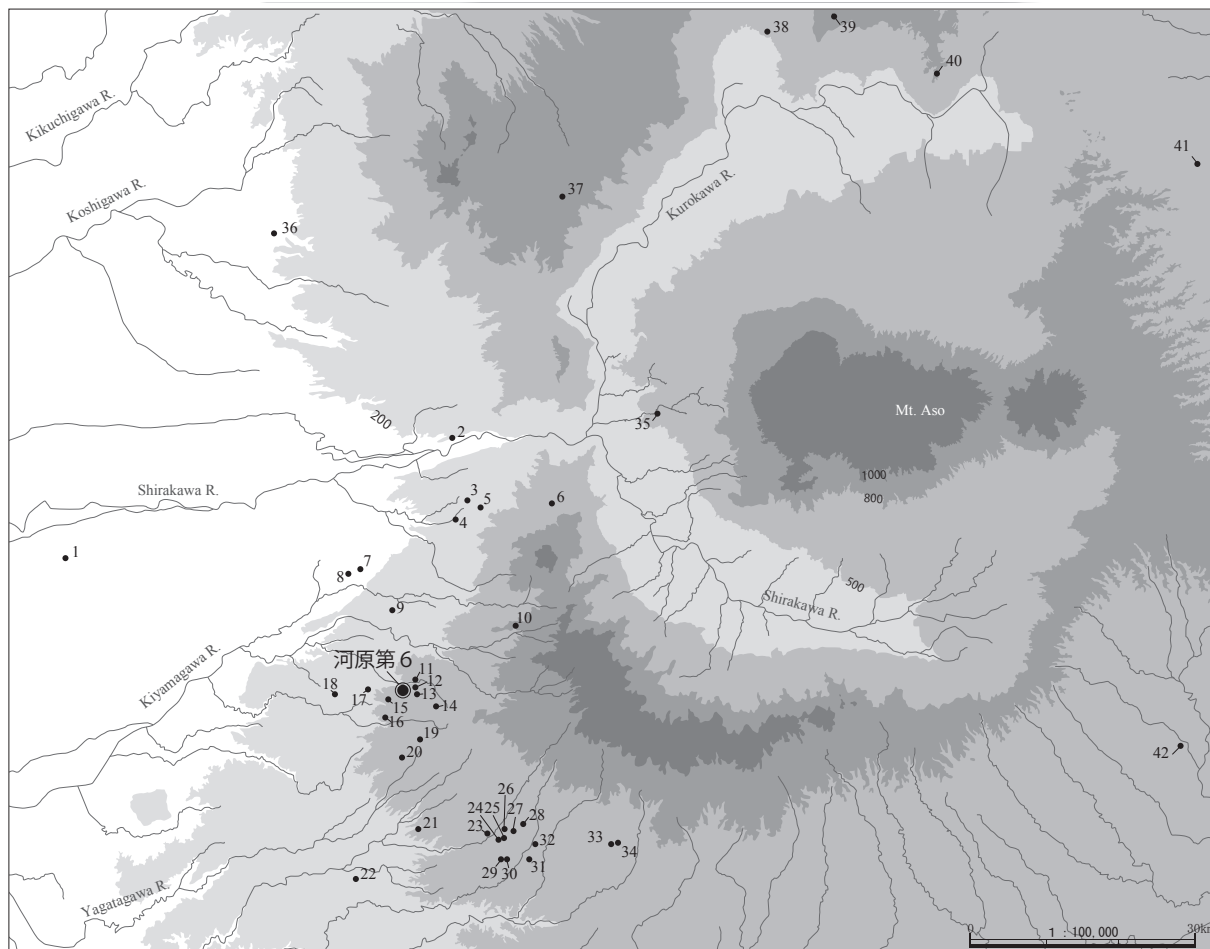
第1章 遺跡をめぐる環境

1. 遺跡の位置

河原第6遺跡（旧西原B遺跡）は、熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野に所在する（第1図）。遺跡は、阿蘇カルデラの南外輪山西部の高畑山（標高 796 m）から西方に下った尾根間にある幅狭な鞍部に立地する。調査区付近の標高は 507 m前後である。表層地質図では、Aso-1 火砕流堆積物（火山碎屑物 - 1）が基盤層となっている。本遺跡は尾根間の鞍部に位置するが、西方は開けており下方の高遊原台地やさらにその下方に広がる熊本平野を見渡すことができる。遺跡の範囲は、この西方の状況が明確ではないが、東限は調査区の東方約 30 mでぶつかる南北方向に走る谷筋とすることができ、南は調査区の背後に尾根に向かって標高を上げ始める農道付近、そして北は現在遺跡を横断する県道を挟んだ鞍部でも遺物を採集することができるので、現地形から遺跡の範囲はおおよそ南北 100 m、東西 150 m以上の範囲とみることができる。水場としては、先に挙げた東側の谷筋をその候補とみることができる。この小川は緑川水系の木山川上流域に属する。なお、野岳型細石刃石器群が見つかった河原第3遺跡は、本遺跡の東方約 300 mの同じ鞍部に立地し、後期旧石器時代前半期の台形様石器群と後半期の百花台型台形石器群が見つかった河原第14遺跡は、本遺跡の南の尾根上に立地するほか、周辺には多くの先史時代遺跡が存在する（第1図）。



第1図 河原第6遺跡の位置と周辺の遺跡（熊本県教育委員会 1994 より作成）



1: 石の本 2: 瀬田池ノ原 3: 桑鶴古屋敷 4: 桑鶴土橋 5: 桑鶴扇坂の口 6: 扇ノ坂C 7: 別辻 8: 小東 9: 中野尾 10: 山の上 11: 河原第 21
 12: 河原第 3 13: 河原第 5 14: 河原第 1 15: 河原第 14 16: 河原第 15 17: 河原第 12 18: 谷頭 19: 吉無田高原 20: 吉無田高原第 8 21: 牧原 B
 22: 北中島西原 23: もみじ台 24: 大矢野原第 10 25: 大矢野原第 11 26: 大矢野原第 12 27: 大矢野原第 13 28: 大矢野原第 15 29: 大矢野原第 62
 30: 大矢野原第 63 31: 小火器射場 32: 大矢野原第 66 33: 大矢野原第 36 34: 大矢野原第 45 35: 河陽 F 36: 湯舟原 37: 阿蘇牧場 B 38: 湯浦
 39: 大観峯 40: 象ヶ鼻 D 41: 笹倉永迫 42: 高畑乙ノ原 (ここで挙げた遺跡は実測図が公表されているものに限定。ゴシック体は発掘調査が実施されたもの)

第 2 図 阿蘇周辺の旧石器時代遺跡分布

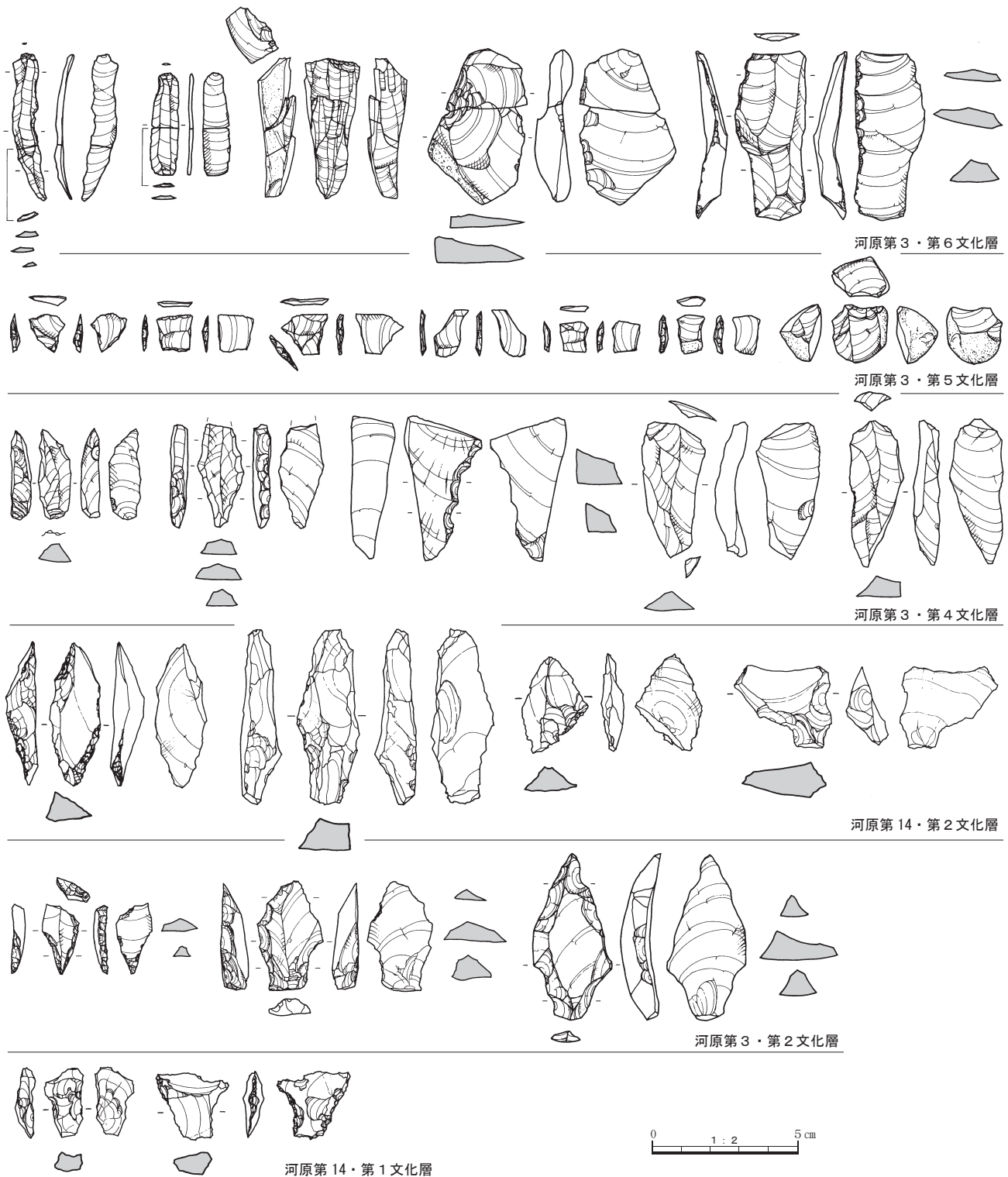
2. 阿蘇南外輪山西麓における旧石器時代～縄文時代遺跡

(1) 分布

阿蘇周辺では、旧石器時代から縄文時代遺跡が数多く確認されている(第 2 図)。中でも阿蘇南外輪山西麓の遺跡群は、「大矢野原遺跡群」と呼ばれており(木崎 1985)、とくに旧石器時代遺跡が多い。現在の確認されている遺跡分布によると、阿蘇外輪山西麓の遺跡群は、緑川水系の木山川やその支流の流域に立地する河原第 3、第 6、第 14 遺跡などのある河原遺跡群と、同じく緑川水系の八勢川、滑川流域に立地する大矢野原遺跡群に分かれる。AT 直下の石刃石器群が見つかった北中島西原遺跡も後者の遺跡群に属する。これらの遺跡は、冠ヶ岳や黒岳など標高 1000 m を超える阿蘇南外輪山の主峰から発する尾根上の、おおむね標高 500 m から 600 m の高標高地に立地することで共通する。

(2) 河原遺跡群における既往の調査

これらの遺跡の多くは表面採集によって確認されたものである。しかし、少ないながらも発掘調査が行われ、阿蘇周辺地域の旧石器時代文化を語るうえで欠かせない成果が得られている。それが 1990 年代後半から 2000 年代前半に熊本大学文学部考古学研究室によっておこなわれた河原第 14 遺跡と河原第 3 遺跡の学術調査である(芝・小畑編 2007)。両遺跡では、アカホヤ火山灰(K-Ah:7.3 cal kyBP)や始良 Tn 火山灰(AT:



第3図 河原第3・第14遺跡における旧石器時代石器群の変遷（芝・小畑編 2007 より作成）

30 cal kyBP) などの広域火山灰のほか、阿蘇火山起源の鍵テフラである草千里ヶ浜パミス (Kpfa : 31 cal kyBP) をテフラを介在しつつ (宮縁 2004)、河原第 14 遺跡では、旧石器時代文化層 4 枚、縄文時代早期文化層が、河原第 3 遺跡では、旧石器時代文化層 6 枚 (ないし 5 枚)、縄文時代文化層 2 枚 (早期・前期および晩期) が確認された。この 2 遺跡の主な調査成果は次のように要約できる。①後期旧石器時代から縄文時代までの複数文化層の確認②河原第 14 遺跡における後期旧石器時代前半期の礫群の検出③両遺跡にお

る百花台型台形石器を主体とする石器群の検出④河原第3遺跡における初期細石刃石器群の検出である（小畑 2007）。第3図に見るように、両遺跡の重層的な文化層によって旧石器時代の石器群は、AT 下位の台形様石器群、AT 上位の剥片尖頭器石器群、角錐状石器・今峠型ナイフ形石器群、基部加工ナイフ形石器群（終末期ナイフ形石器群）、百花台型台形石器群、野岳型細石刃石器群の少なくとも6つの石器群に区分することができる。これらの石器群の一部は¹⁴C年代も得られており、台形様石器群（河原第14）は29,360 ± 360 yrBP、28,830 ± 350 yrBP、剥片尖頭器石器群出土層準（河原第3）は24,600 ± 200yrBP、野岳型細石刃石器群（河原第3）は14,690 ± 70 yrBPである。河原第3遺跡では調査区が狭小であるため、細石刃石器群より下位の石器群は全容は不明であるが、これらが層位的に区分可能であることは、阿蘇南外輪山西麓が旧石器時代編年研究にとって有望な地域であることを示している。

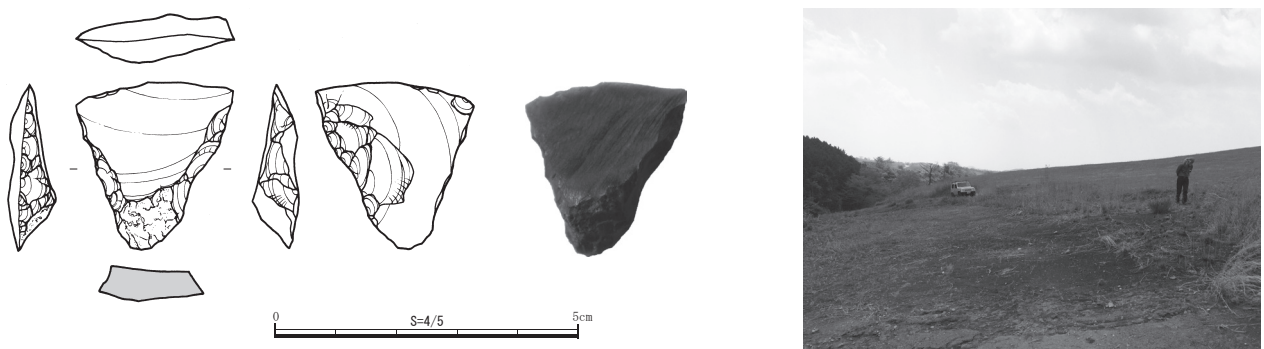
（3）河原第17遺跡発見の台形様石器

上述のとおり、西原村河原周辺では、河原第3遺跡、第14遺跡以外にも多数の旧石器時代～縄文時代遺跡が確認されている（第1・2図）。これらの採集遺物は、阿蘇狩人の会が数度にわたって紹介している（阿蘇狩人の会 2004、2005、2007）。これらの紹介後も、福田正文氏（故人）を中心に丹念な遺跡の探索活動が続けられていた。ここに紹介する資料は、福田氏が2014年4月に河原第17遺跡において採集した台形様石器1点である。

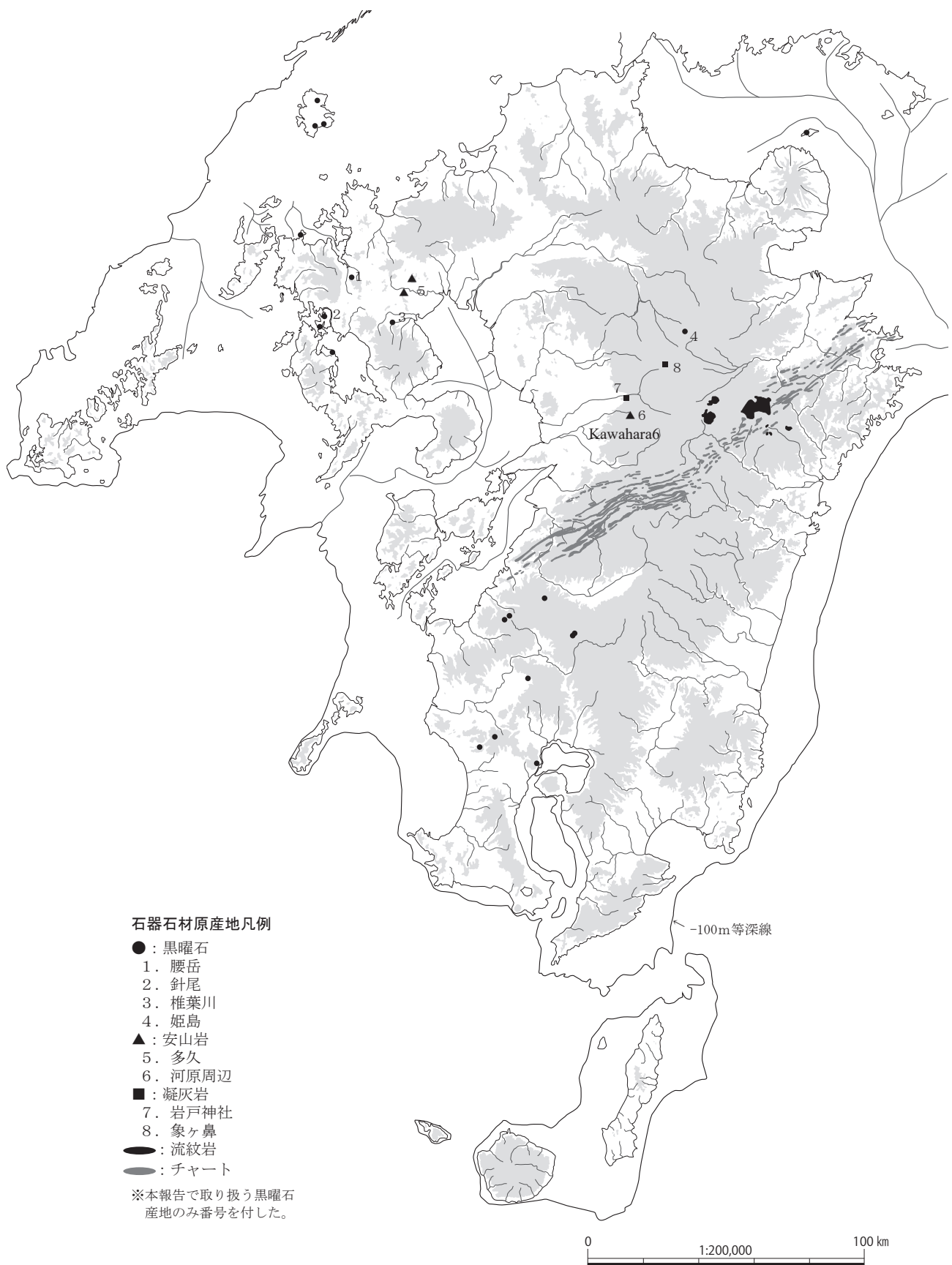
河原第17遺跡は、河原第3遺跡や第6遺跡が位置する鞍部の北に谷を挟んで、標高を上げた尾根上の平坦面から緩斜面に立地する（第1図）。採集場所には時期不詳ながらローム層が露出する（第4図右）。第4図左は阿蘇4系黒曜石製の台形様石器である。自然面を有するやや厚みをもつ不定形剥片を素材として、平面形が逆台形状になるように両側縁にプランティングを施す。裏面には平坦剥離が認められる。長さ2.74cm、幅2.60cm、厚さ0.68cm、重量3.4g。なお、同地から採集されたのはこれのみで、周辺に剥片等は認められなかったという。筆者も河原第6遺跡第3次調査の際に福田氏とともに現地を訪れたが、この石器に関連するような遺物は採集できなかった。

3. 河原第6遺跡をめぐる石材資源環境

河原第6遺跡から出土した石器石材には、黒曜石、安山岩、チャート、凝灰岩などがあり、黒曜石と安山岩はさらにいくつかの産地のものに分かれる。これらの石器石材分類は、筆者の肉眼観察と黒曜石については蛍光X線分析（波長分散型）の結果（第5章2参照）に基づく。河原第6遺跡出土石材の推定産地の位置は第5図に掲げた。以下、出土石器石材の特徴について個別に記載する。



第4図 河原第17遺跡発見の台形様石器（左）と採集場所（右）



第5図 河原第6遺跡をめぐる石材資源環境（芝・小畑編 2007 より作成）

腰岳系黒曜石：漆黒色透明で、球顆などの不純物をほとんど含まないもの。流理状の縞が入ることが多い。(亜)角礫は佐賀県伊万里市の腰岳で採取でき、円礫は長崎県松浦市の星鹿半島付近で採取できる。

針尾系黒曜石：長崎県佐世保市の松岳流紋岩等に含まれる黒曜石。拳大から人頭大の大きさとガラス質が強く良質である。色調がやや青緑色を呈することに大きな特徴がみられる。針尾島やその周辺、西彼杵半島北部で採集できる。

椎葉川産黒曜石：佐賀県嬉野町の椎葉川流紋岩に含まれる黒曜石。色調が姫島産黒曜石に類似しており、ややスリガラス状で乳白色を呈する。ガラス質が強く良質である。

小国産黒曜石：熊本県小国町山甲川（万年山）流紋岩に含まれる黒曜石。ガラス質が強く、色調は漆黒～半透明であるが、白い斑晶が多く含まれることに大きな特徴が見られる。阿蘇郡小国町から日田市大山町周辺で採集できる。

阿蘇4系黒曜石：阿蘇4火砕流堆積物に含まれる黒曜石。大きさは親指大でガラス質が強く、良質な黒曜石である。稀にピンポン玉大から拳大の大きさの黒曜石がみられる。色調は漆黒、乳白色、青緑色など多様で、縞模様が入ることが大きな特徴である。現在、阿蘇周辺では阿蘇市的石、山都町大矢野原周辺、西原村冠ヶ岳周辺などで採集されているが、本火砕流堆積物は中、北部九州を中心に、本州や四国の一部まで達している。

サヌカイト質安山岩：ガラス質が強く非常に良質なサヌカイト質安山岩。佐賀県老松山、鬼ノ鼻山周辺で産出する。

阿蘇産安山岩：阿蘇火砕流堆積物に含まれる安山岩。表面は多孔質のものが多く、多久産安山岩と比較するとガラス質は弱く、多孔質で不純物が含まれる。大きさは拳大から人頭大以上でまで様々である。阿蘇外輪山周辺で採集される。

岩戸神社産安山岩：阿蘇2火砕流堆積物の基部に含まれるガラス質溶結凝灰岩。ガラス質が強く、非常に硬質である。ただ風化すると粉をふく場合もある。現在のところ、大津町岩戸神社周辺で露頭が確認されている。

チャート：臼杵―八代構造線周辺で産出する。ガラス質は強く、色調は乳白色、灰色、青緑色などバラエティに富む。特に緑川で採集されるチャートの新しい剥離面は緑色であるが、風化面は白色を呈する。

阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩：阿蘇2火砕流堆積物の基部にレンズ状に含まれるガラス質溶結凝灰岩。新しい剥離面は、漆黒色で黒曜石に酷似するが、風化が進行すると石炭様になる。現在のところ、阿蘇市象ヶ鼻周辺でしか露頭は確認されていないが、他の露頭地が発見される可能性も否定できない。

第2章 調査の経緯

1. 調査の経緯

前述の河原第14遺跡および第3遺跡の調査は、当該地域における旧石器時代石器群の一端を知るうえで大きな成果を挙げたが、後期旧石器時代前半期（河原第14遺跡第1文化層）と後期旧石器時代末の終末期ナイフ形石器群（百花台型台形石器含む）や細石刃石器群（河原第14遺跡第3文化層、河原第3遺跡第5・6文化層）との間の石器群の様相は、定型石器が少なさやローカル石材の利用などの特徴もあり、やや不明瞭である。これは、他文化層で卓越する遠隔地産石材（西北九州産石材）利用との対照性という点で重要で